

論壇

国際基督教
大学教授

森本あんり



大学選びは これでいいのか

新学年を迎え、今年も各大学のキャンパスは新入生で賑わっていることであろう。日本には、大学と呼ばれる高等教育機関が国公私立あわせて700ほどある。いずれの大学に入るにしても、新入生はそれぞれ自分の興味や関心に

沿って志望する学部や学科を選んでいく。

だが、そこに問題はないだろうか。志望先を決める時、ほとんどの学生は高校生である。彼らは、大学で何を学ぶかを、高校生の知識で決めなければならぬのである。なかには、物理や歴史や美術など、高校の授業科目名から内容を類推することができそう

なものもある。しかし、学問分野によっては、高校のカリキュラムにまったく登場しないものもある。だから、英語が上手になりたいから言語学を志す、などという勘違いも生まれるのである。

受験生は、数学が得意なら理系、英語が得意なら文系、と大枠を決めるが、そのような二分法にあてはまらない能

力や興味をもつ学生も少なくない。その上で彼らは、卒業後どんな職業に就きたいかを考え、大学を職業訓練や資格取得の場と見るようになる。これが大学の本来的な選び方であるとは思われない。

まだ入学もしていない段階で卒業後を見通すことを求めるのは、その間に挟まれた大学教育の意義を根本から否定するにも等しい。新入生たちには、教育の完成期を含むこの多感な数年間に、自分が大

きく成長し変貌するという可能性を信ずる権利がある。大学はその当然の期待に応え、彼らの成長と変貌を助けるのにふさわしい柔軟な制度を用意すべきである。

日本の大学は、入学時に専攻を決めさせた上で、学部学科によるコース別の教育を行うことを前提として作られてきた。このような制度は、ス

「良い地に落ちた種」を育てる

単一樹種の植林

ギヤヒノキの人工植樹林にも例えられる。日本の山々に整然と並ぶ単一樹種の植林は、20世紀の高度成長経済を支える国家の資源工場であった。しかし、今日の大学の課題は、効率よく画一的な人材を大量に生産することではない。これに対して、武蔵野に今も残る雑木林には、さまざまな種類の木が姿形もいろいろに大小とり交えて自由に生い茂っており、その多様で複合

的な植生が森全体を生かす明るい生命力となっている。このような雑木林の明るさとしたたかさと自由さが、21世紀の大学に求められているのである。新しい時代を拓くのは、自己の専門性に閉じこめることなく、異分野間の交流と総合を歓迎する自由な活力と創造性である。

■ 専攻は入学後に決めるべき

昨今では「教養」や「リベラルアーツ」を掲げる大学も増えてきた。喜ばしいことであるが、その内実について必

ずしも一致した見解があるわけではない。しかし少なくとも、「人間を自由にする学芸」を育むためには、それにふさわしい制度が必要であろう。学生は、専攻を決めてから入学するのでなく、入学してから専攻を決めるべきである。

イエスは「良い地に落ちた種」の成長と変貌を語られた。それは、人工植林ではなく雑木林の発想である。将来を担う今年の新入学生たちのために、良い地を提供したいと願うばかりである。